

「コミュニテースクールについて考えること」

足利市立名草小学校 多田 一 雄

1 はじめに

コミュニテースクールは、1920年代においてアメリカで提唱されたものである。その内容は小学校では、児童と地域社会に住む人々が、地域社会の将来を創造し、ともに両者の主催する活動に参加することによって、学校と地域社会の関係をより深めていこうという学校のあり方を求めたものである。

1930年以降、その学校観はアメリカにおいて発展をとげ、現在のアメリカの教育に大きな影響を及ぼすに至っている。

この学校観について、日本においても戦後幾多の試みが見られていたが、特定の地域社会だけにその活動の場を設けていたことや、それをブルジョア社会の建設手段ととらえるマルクス主義の批判などから、アメリカのようには継続されなかったようである。

しかし、現在の社会において、核家族化が進むなかで、家庭、学校、そして地域社会に少年に関する様々な問題があらわれていることを思うに、コミュニテースクールに大きな関心を寄せたわけである。

社会的なものの見方を知らない子どもたちに、教室の中だけの学習で、ものの見方を理解(含む態度化)させることができるのだろうか。ひとりひとりの児童が地域社会の活動に参加することなくして、これから生きる地域社会のあり方など創造することができるのだろうか。

たとえば「じゅく」の問題があるが、個人の学習意欲を考えた時それを否定することはできない。また、近年盛んになってきたスポーツを中心とする小学校の部活動においても、その理論は、子どもたちの心身の健全な育成をはかるのにたいへん有効な手段であるように思う。けれども、その有効性とは反するかのように、毎日の放課後、けいごとや部活動によって放課後の自由な時間が短縮され、子どもたちの創造的な活動に弊害をもたらしているように思う。いわゆる余暇時間の活用を知らない子どもたちが育ちつつあることに目を向ける必要があるのではないだろうか。

この問題を学校内で解決することは決して不可能なことではない。しかしより広い視野に立ち見つめると、家庭・学校、そして地域社会の融合された教育環境の中で、自由時間の活用のしかたを考えさせ、自らの生き方を示唆していくのもひとつの方法のように思う。

様々な観点からコミュニテースクールのあり方を創造することができるが、現在起こりつつある教育上の問題を考察し、市教育目標と関連づけ、地域の実情にあわせてひとつのプランを述べてみることにしたい。

2 教育上の諸問題についての考察

(1) 非行について

今日、家庭内暴力、校内暴力、シンナー遊び、喫煙などに代表されるような少年期の非行問題が大きく取り上げられ、また、その年齢層が増々低年齢化していることも、戦後の混乱期を除いて、今までにない社会問題となっている。

少年期・青年期の心理状態が不安定なこととあわせ、子ども達の発達環境の変化とがからみあい、社会的行動力の判断能力に欠ける子どもたちが育ちつつあることにひとつの原因があるのではないだろうか。

遊びの場面からとらえると、

「自然の中で自由にかきまわる。」

と、いったようなことも少なくなり、自由時間は家でテレビを見続ける子どもが増えてきている。そこには、友達意識というか仲間意識というものも存在しているのだろうか。

また、このような遊びの上での社会的経験不足にあわせ、家庭の放任的な子どもの扱いから、自己中心的な考えから脱し切れずにいる、いわば、心理的に幼児な性格を乗り切れずにいることも現代の子どものひとつの特徴のように思う。

なかでも、自己中心的な考え方などは、子どもに限らず、我々大人の間にも、地域社会の「連帯意識感」が失われつつあることから考えられてくる。

これらの問題を考えた時、家庭ばかりでなく地域社会の環境変化にもその原因があるのではないだろうか。

お小遣いを与えるだけでその用途に関心を持たぬままでよいのだろうか。

自動販売機でたばこや酒類を購入する子どもを見過ごす地域社会、それをつかわず家庭であってよいのだろうか。

もっともっと家庭と地域社会、そして学校の三者が連携し、地域社会に生きる子どもたちを見つめていかねばならないように思う。

家庭や学校では、テレビ視聴の時間をおさえるよう働きかけ、だれとでもわけへだてなく遊べるような環境づくりが必要となってくる。また、子どもとふれあう時間をできるだけ設け、子どもと心のつながりを強めていくことも大切なことである。

地域社会では、子ども会活動などをより活発化させることも一方法であろう。子どもみずから計画し、みずから運営し、みんなで喜びあえる子供会づくりに心がけることが大切になる。

そして三者が協力し、非行問題のでない地域環境づくりを推進することがこの問題の根本的な解決策のように思う。

(2) 部活動とけいごと

放課後の日没までに至る自由時間、部活動にはげむ児童が小学校でもかなり増えつつある。心身の健全育成をめざすひとつの手段として、それぞれの学校で力を入れつつあることも事実である。

しかし、その理想を追い求めることはすばらしいことだが、練習時間の扱い方や部活動に参加していない児童との友人関係などで、まだ未解決の問題が多いように思う。

最近、私の担任するスポーツ部活動に参加する子どものほとんどが、一時期練習に参加しなくなったことがあった。その理由は、練習時間が自由時間を少なくしているの、毎日の練習（日曜を除く）の中で、水曜、土曜を休みにしてほしいというのである。

“勝とう”という意欲のもとに練習にはげもうとする意識からすれば、受け入れられないことであろうが、子どもたちの言い分にも一理あるように思えた。

何をするときまっているわけではない。ただ、友だちと自由に遊べる時間がほしいというのであった。子ども達の遊び方にまた問題があるということから水曜日のみ休みとすることになったが、子どもの欲求と練習時間の組み入れの問題は難しいことのように思えたのである。

また、友人関係の問題であるが、部活動成員間にあってはそれほど大きな問題はないようであるが、参加していない子どもとの間には、心のつながりが高学年になればなるほど薄れかけているようだ。参加していない児童の多くが、家に帰るなりテレビを見始めるといったことにも、また別の視点から問題があるように思う。とかくそのような児童に対して、部活動の成員とは違った見方をする傾向にある、極端には排他的なまでの冷ややかな目というものが子ども達に育っていたとすれば、心身の健全育成とはかけ離れたものになってしまうように思える。

強くなりたいと願う気持ち、せめて地域全体の子どもの心さげびとして出てくるような言葉にしていきたいものである。

次に、けいごと（じゅくを含む）について考えてみたが、最近の子どもを持つ親にとって、学校外教育に対する期待は日毎に増大しつつあるようだ。小学校高学年では、かなりの児童が何らかのけいごとに参加しているようだ。

これらの原因は、公的教育に対する不信から生まれていることも一因としてあげられ、こと、学校外教育については、余暇の活用をしらない子どもを育てることにのみなりかねないことを家庭で忘れないでほしいと思う。

けいごとを自我の成長のみでとらえるならば現状のままで良いかもしれない。しかし貴重な余暇時間を、仲間とともに、よりよい地域社会のあり方をめぐって助け合い、はげましあう内容の活動というものを、子どもの学習意欲とあわせ考えることができたらどんなにすばらしいことではないだろうか。

公民館・児童館などを使っての音楽教室・書道教育、またふるさとの伝統を受け継ぐような方法が考えられ、また、長期休業を利用した宿泊学習など、決して不可能なことでは

ないように思える。

また、親と子がいっしょに机を並べて学ぶことも、親子のきずなを深める上でより有効な方法ではないだろうか。

子どもの健やかな成長を願うのに、無関心であってはならない。

自由時間の過し方等、子どもに考えさせる機会をもうけ、自主的に活動できる場を設定することが大切な条件になってくる。

3 コミュニテースクールと市教育目標

市教育目標とコミュニテースクールの関連づけをはかるために、市教育目標の中から、コミュニテースクールづくりと関連性の高いと思われる目標を取り上げる。そして、コミュニテースクールづくりのいろいろな場面でその具現化をはからねばならない。

教育目標番号

1. 郷土の自然や文化に親しみ、その保護・発展に努める。
2. 動植物を愛し、自然に親しむ豊かな心を養う。
4. いろいろな運動を楽しみ、体力を身につける。
13. 社会の一員としての自覚を持ち、社会的態度を身につける。
18. 友達と互いに協力し合うことができる。
27. よりよい仲間づくりをするために、不合理な差別や偏見を持たないで生活することができる。
30. 奉仕活動の大切さを理解し、積極的にその活動に参加する。
32. 敬老の精神を身につけ実践する。
34. 男女の特性や家族の役割を理解し、よりよい家庭を築く生活態度を身につける。
41. 人格の基本となる望ましい生活態度を身につける。
46. 勤労の尊さを理解し実践する。
54. 基本的な生活習慣を身につけ、自ら考え正しく判断し行動することができる。
62. 自由時間を有効に過ごす。

4 コミュニテースクールのプラン

学校と地域社会が協力し、地域社会に生きる子どもの育成をめざすための学校・地域教育プランを、G・オルセンの著書、「学校と地域社会」の中の「学校と地域社会を結ぶ十の架け橋」をもとに試みてみた。

(1) 文書資料の利用

地域社会を正しく見つめる子どもの育成にとって、たくさんの文献資料が考えられる。

自然観察との関連を考えれば、百科辞典の利用などが考えられるが、地域の伝説や歴史的な文化財を調べる上で、科学的な根拠となるのが文書資料である。

(学校での実践プラン)

四季の地域の動植物の観察。それを百科辞典等で調べる。そして、それらの貴重な動植物保護のために看板を建て、継続的なパトロール活動を行う児童組織をつくる。

(2) 視聴覚資料の利用

四季の地域のうつりかわり、過去の地域の様子を保存する上で視聴覚資料が大きな役割をはたすものではないだろうか。

特に、映像はその時代に生きた人々の生の姿を再現することができる。自分たちの地域がどのように変化し、現代の姿になってきたかなど、子どもたちの学習意欲をこれほどかきたてるものがほかにあるだろうか。

(学校での実践プラン)

今、この地域に生きて働く人々の姿を映像としてとらえていく活動を通して、時の移りかわりにおける生活様式の変化などを学びとる。(特に中・高学年)

(3) 校外専門家の来校指導、校外専門家、お年よりの人たちへの調査活動

農業一筋に歩む人、つけものづくり一筋に歩む人、陶芸家として一筋に歩む人等、地域にはそれぞれの分野で、その道一筋に生きる人々がたくさんいる。それらの人々の心と接することによって、職業というものを理解し、この地域を守り育ててきた人々の心意気というものを子どもたちが理解していくものである。

(学校での実践プラン)

しいたけ作りの苦勞と仕事へのほこりについて話を聞いたり、陶芸家の焼き物づくりの話などを聞いたりして、地域の産業に対する理解を深めることができる。また、実際にその仕事の様子を調査することにより、学び方を学び、より広い視野をはぐくむことができるように思う。そして、自由時間を活用し、子どもが自主的に調査活動しようとするような態度の育成をはかりたい。

(4) 現場見学学習、社会調査学習

小学校社会科学習指導要領の各学年の目標に次のようなことが書かれている。(抜粋)

1年 日常生活で経験する社会的事象を具体的に観察させ、効果的に表現させる。

2年 職業としての仕事を具体的に観察させ、その特徴に気付かせる。

3年 地域社会における社会的事象を具体的に観察させるとともに、地図その他の資料を効果的に活用させる。

4年 地域社会における社会的事象を具体的に観察させるとともに、具体的資料の特徴を考えながら効果的に活用させる。

以上のように、この期における社会的態度の育成の上で、地域観察学習の大切さがうかがえる。

(学校での実践プラン)

年間指導計画の中に社会科学習の場面で、時間配分の可能な限りにおいて見学学習を取り入れていく。そして、より以上に子どもが追求意欲を示したならば、自由時間の活用をはからせたい。

ここに名草小学校における各学年別観察学習単元、観察場所、実時間等を例として挙げておく。

学年	単元	観察場所	時間	学年	単元	観察場所	時間
1年	学校たんけん	校 内	1	3年	足利のようす	地域及び市内	4
"	ようごの先生	校 内	1	"	工場の仕事	地域及び市内工場	4
"	ようむいんさん	校 内	1	"	農家の仕事	地域及び市内	4
"	どうしてこわしたの	校 内	1	"	足利の商店がい	市内通り2丁目	3
"	みんなのプール	校 内	1	"	足利市に残る古い物調べ	地域の家庭	2
"	みんなの公園	地 域	2	"	足利市のようすの うつりかわり	地域及び市内	4
"	かぞくのせわ	家 庭	4				
"	だいどころのしごと	家 庭	4	4年	くらしをささえる水	浄水場及び配水場	4
2年	店ではたらく人たち	近所のお店	3	"	ごみのしまつ	ごみ処理場	2
"	いねを育てる人たち	地 域	5	"	下水のしまつ	下水処理場	2
"	こうばではたらく人たち	パン工場	4	"	火事をふせぐ	足利消防署	2
"	駅ではたらく人たち	足 利 駅	2	"	よりよいくらしの ために	県立図書館 名草公民館	5
"	ゆうびんをはこぶ 人たち	足利郵便局	2	"	三栗谷用水を開く	三栗谷用水	4

(5) 長期調査旅行のプラン

小学校では、各学校において6年次に修学旅行を実施しているが、この価値は、コミュニティースクールの長期調査旅行と一致するものである。それゆえに、この旅行の実施にあたっては、その意義を見い出せるようなプランを作成することが望まれるものである。

つまり、旅というものは、未知の世界へのあこがれをかきたて、視野を広げてくれる。

また、教室では学習しきれない他の地域社会を実際に見ることによって、自分の地域とともにその良さを発見できるようにもなるものである。

そして、人間関係でも、教師と子どもがたとえ二日なりとも交り合い、共同生活を営むことによって、協力的な態度を身につけるようになるのではないだろうか。

(学校での実践プラン)

- ・ 見学都市の自然環境（気候・地形等）の特色を学ぶ
- ・ 遊び、学び、食事及び入浴等を児童と教師が共にし、心から話し合える環境づくりをはかる。

(6) 学校キャンプ

学校キャンプには、普段の学校生活では味わうことのできない教育的意義が存在する。ひとつには共同生活の規律というものが挙げられる。とかく家庭内では、ひとりよがりのわがままな人格が育つ傾向にあるが、一定の期間（少なくとも3～4日）を通して共同生活を営むことにより、基本的生活習慣の育成とともに、協力的態度を育てたいものである。また、家庭のありがたさを知るひとつのきっかけにもなるだろう。

(学校での実践プラン)

四季、それぞれのキャンプの実施

- 学習内容として
- ① 食料等の供給など、何日間かの生活プランの立案、及び実践
 - ② 地域の自然観察
 - ③ 自然のものを使った創作活動

(7) 奉仕・協力活動

これからの地域を良くするも悪くするも、ここに生まれ育つ人々の意識にかかわってくる。子どもたち、そして大人が、ともに主体的に社会奉仕活動を実践することにより、自ら守り抜く、美しい郷土ができるものである。

(学校での実践プラン)

- ・ ゆとりの時間や自由時間を利用して、地区内にある史跡等公共施設の美化を計画する。
- ・ 学校を緑で囲む、花いっぱい、という意識を發展させ、地域の人々と協力しフラワーロードづくりなどを計画する。
- ・ 一円募金等の輪を学校から地域へ広げていく。

(8) 職業体験

これは、児童期の内容として無理な問題であるので省略する。

(9) その他

地域社会の中に限らず、人間関係はたてと横のつながりが大切である。現在の学校になかなか来ることのできない地域のお年よりを招き、子どもたちと楽しい一日を設けることも大切なことのように思う。

(学校でのプラン)

- ・ 運動会・学芸会等行事を行う時、児童会で招待する。
- ・ 寿大学（公民館主催事業）と協力し、授業参観やお年よりとともに遊ぶ会などを実施する。

5 おわりに

余暇時間の活用を知らない子どもたちが増えている。……………そんな観点からその解決策をあれこれ考えているうちに浮かんできたのが、このコミュニテースクールの言葉でした。学校という社会は、ある意味において一般社会から隔離された社会かもしれない。もっと地域とともに歩む学校があり、そして

「地域というひとつの輪の中で子どもの成長を援助していく考えはどんなものだろうか。」という思いがめぐらし、思いつくままに、エドワード・G・オルゼンの著書などを参考にしながら書いてみました。

社会がめまぐるしく変わりゆく今日、非行、余暇時間の活用の問題は、その場限りの教育では解決しえないものとペンを走らせながらつくづく感じました。これからの一年、この机上プランがどれだけ実践できるか難しい問題ですが、可能な限りにおいて努力していきたいと思うものです。

参考文献

- ・ エドワード・G・オルゼン著 「学校と地域社会」 小学館
- ・ 石山修平著 「地域社会学校」 金子書房
- ・ 日本子どもを守る会編 「子ども白書」
- ・ 永井憲一編 「学校教育と社会教育の結合」 勁草書房